

結城素明と稲葉家

稲葉家展示解説リーフレット 一

はじめに

稲葉家には、豪華な「極彩色草花之図金屏風」(稲葉家書画B〇〇三)が残されています。この六曲屏風は木箱に入っており、箱蓋には次の墨書があります。

「(箱蓋表面) 結城素明筆極彩色草花之図金屏風 志雙」

「(箱蓋裏面) 大正八年五月九日素明画伯来遊当家楼上一二於て揮毫 紫鱗誌

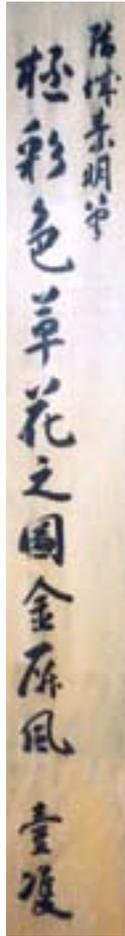
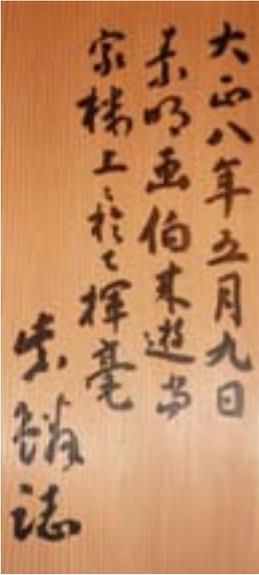
稲葉本家所蔵

この墨書を記した「紫鱗」とは、「豪商稲葉本家」入口に銅像がある稲葉家一三代当主であった稲葉市郎右衛門景介(一八八二〜一九五四)の雅号です。箱書の内容から、この屏風は、大正八(一九一九)年五月九日に結城素明(一八七五〜一九五七)が描いたことがわかります。

素明は、大正八年五月八〜一日に稲葉家へ立ち寄っており、九日には、箱書にあるように「極彩色草花之図金屏風」を描いています。翌二〇日に見た久美浜の風景を描いた「静湾初夏」(稲葉家書画B〇一八)は、第四回金鈴社展覧会へ出品されており、出品後に稲葉家の所蔵となっています。

本リーフレットは、稲葉家文書に残された関係資料から、結城素明と稲葉家の関係、「極彩色草花之図金屏風」や「静湾初夏」が描かれた背景のほか、近代稲葉家と関わりがあった画家を見るものとなりました。

(文中人名の敬称は略させていただきます)



金屏風箱書

一・素明来丹以前 ～稲葉宅蔵肖像画と小山栄達の来但～

稲葉家は、江戸時代後期の一〇代市郎右衛門英好や一二代市郎右衛門大訓が、国学者の鈴木重胤と師弟関係にあったことから国学や和歌を嗜み、明治時代の一二代市郎右衛門英裕は、「翠窓」の雅号をもち和歌・漢詩を、弟の宅蔵が「東園」の雅号をもち水墨画や和歌・漢詩を嗜んでいました。特に宅蔵(一八四九〜一九一五)は、水墨画の作品を残しているほか、明治四三年八月一日から一〇月二〇日には京都府立療病院に入院した一二代市郎右衛門宛に、毎日の出来事を絵手紙八七枚に描いて送っており(稲葉家文書A九三・〇〇二)、絵心がありました。宅蔵は、最晩年の大正六年に、野口峰吉に依頼して油彩の自画像を描かせています(稲葉家書画B〇〇一)。絵には、作者のサインなどが見られませんが、一三代市郎右衛門の日記(稲葉家文書C六一・〇六九)には、(七月二四日) 今朝野口画伯来り、東園翁肖像ヲ揮毫 (七月二五日) 今朝六時野口画伯帰但 昨日ヲ以テ東園翁肖像画完成シタリ (八月八日) 東園翁肖像画揮毫料トシテ野口峰吉氏へ金貳拾円送ル 午後野口氏竹野郡へ写生旅行ノ途次一寸立寄ル と記されており、野口峰吉が描いたことがわかります。



油彩稲葉宅蔵肖像画 (稲葉家書画B001)

ほかに稲葉家と関わりのある画家として、文展・帝展で活躍した日本画家の
 小山栄達（一八八〇〜一九四五）が挙げられます。

大正七年一月に小山は、但馬を訪れています。小山来但に際しては、一三代市郎右衛門と鎌田三郎兵衛を発企として、城崎温泉三木屋別荘にて雅会が開催されました。その後、小山が帰京するまでの間に、大阪・京都から一三代市郎右衛門宛てへ近況を知らせる葉書が残されています（稲葉家文書A一一・〇四八〜〇五三）。なお、この雅会の案内には、席上において小山の「最近ノ作尺五緞本拾二枚」とともに、「結城素明筆土方伯決死入萩城図及尾竹竹坡筆業平東下り図ヲ御覧ニ供ス」と記されており、この段階には一三代市郎右衛門と素明の間に接点があった可能性があります（稲葉家文書A一一・〇四八）。



稲葉家略系図（写真は、稲葉家写真資料より）

二・結城素明について

結城素明は、明治三〇年代から昭和にかけて活躍した日本画家です。本名は貞松といい、本名・雅号ともに、有名な勝海舟が命名したと言われています。一六歳の時には、岡倉天心の紹介で川端玉章のもとへ入門し、翌年に東京美術学校日本画科へ入学しています。卒業後、西洋画科へ再入学し、明治三五年に日本画科嘱託、三七年に助教、大正二年に教授となっています。

その間、明治三年に創設された无声会へ参加し、平福百穂とともに明治年間の同会の代表的な画家として活動しているほか、文展においても活躍していました。大正五年五月には、吉川靈華・平福百穂・鏑木清方・松岡映丘とともに金鈴社を結成し、大正二年五月の解散まで七回の展覧会が開催されました。その後、大正二二年春から一四年三月まで、文部省島島学生としてヨーロッパ留学し、主としてフランス・イギリスを訪れています。帰国後は帝国美術院会員となり、帝展においても活躍しました。「素明芸術の面目は、東洋の伝統画法を守りながら、しかも西洋画の写実を追求した点にある。」と評価される日本画家です（『特別展結城素明』山種美術館 一九八五年）。

また素明は、過去の画家の研究も行っていました。丹後地域では、昭和一六年六月に宮津を、翌一七年四月には宮津・峰山を訪れています。これは、江戸時代後期に『丹哥府志』の挿図を描いた佐藤正持に関する現地調査のためでした。昭和一五年一月七日にあった素明のラジオ講演を聞いた糸井仙之助（岩瀧出身、東京在住）は、翌日に素明のもとを訪れ、丹後地域に佐藤の作品が残っていることを知らせました。糸井は、糸井文庫（舞鶴市指定文化財）を収集した人物であり、丹後地域の郷土史に並々ならぬ関心を持っていました。

当時、宮津の龍灯社出版部より発刊されていた『郷土と美術』二一・四号には、結城素明のラジオ講演筆記「国史を描いた画家」が素明の許諾を得て掲載されたほか、糸井が「佐藤正持に関する管見」を寄稿しています。あわせて素明の宮津・峰山の調査には、龍灯社出版部の木下幸吉（微風）と澤村秀夫が案内していました。素明の佐藤正持に関する研究は、昭和一九年に発刊された『勲皇の画家佐藤正持』という著書に結実されています。

三・結城素明と稲葉家の関係

素明と稲葉家の関係がうかがえる資料としては、一三代市郎右衛門の義父岡澤玄太（妻千鶴の父）の書簡があります。一三代市郎右衛門は、素明の屏風の入手について岡澤に相談していたようであり、これに対して岡澤は、大正三年九月一〇日付の書簡に、自分も素明の絵を二点求めたが、屏風は出し入れに面倒なため、掛軸の方が良いのではと回答しています（稲葉家文書C六七・七六二）。書簡の内容からは、この段階に一三代市郎右衛門と素明の間に面識があったかどうかはわかりません。

素明と稲葉家の関係が明確にわかる資料は、大正八（一九一九）年に素明が書き残した「応挙寺を訪ふ」という論文の次の一節です。

「私が丹後久美浜の人稲葉翠城君に案内されて同寺を訪ふたのは五月の十日頃であつた。鏑木清方君と一緒に帝劇で梅蘭芳を観た翌日、東京を立つたのである」

【結城素明「応挙寺を訪ふ」『中央美術』第五卷第七号 一九一九年】

応挙寺とは、有名な大乘寺（兵庫県美方郡香美町）のことです。

素明の文中に案内者として出てくる稲葉翠城とは、一三代市郎右衛門の叔父稲葉宅蔵の婚養子にあたる稲葉岸之助（一八六九～一九四二）のことです。

岸之助は、但馬国気多郡国府村（現在の兵庫県豊岡市日高町）出身で、旧姓は上坂といい、明治二七（一八九四）年に明治法律学校を卒業後、山梨県属、台湾新竹県属、台北県属、台湾総督府新竹庁属などを歴任し、同じ但馬出身の桜井勉知事の秘書役も務めていました（稲葉家文書E八一・六四）。また日清戦争・日露戦争では、軍曹として従軍しています。明治三四（一九〇二）年に岸之助は、宅蔵の長女王玉蟲と結婚しており、宅蔵の死去に伴う大正七（一九一八）年五月に家督を相続しています（稲葉家文書E七八・一〇〇）。岸之助は、宅蔵と同様に水墨画や詩文にも長けており、翠城という雅号をもっていました。漢詩は、福知山出身で漢詩壇の大御所岩溪裳川（岩溪普【一八五二

～一九四三）により添削を受けた文書が残されています（稲葉家文書B四四・〇六三）。また墨蹟類（稲葉家文書E八一）、詩文集（稲葉家文書B四〇）、書画類が残されています。岸之助（翠城）は、東京に在住していた時期があり、その関係から素明と面識があったものと推定されます。

四・結城素明の来丹と「極彩色草花之図金屏風」の作成

素明の「応挙寺を訪ふ」の文中にある梅蘭芳（メイランファン【一八九四～一九六一】）は、京劇の四大名旦と呼ばれた名優の一人です。二〇〇九年三月に公開された映画「花の生涯～梅蘭芳～」には、その生涯が描かれています。大正八年の来日公演は、梅蘭芳の初めての海外公演であり、帝国劇場（帝劇）を会場に五月一日～二日まで行われました。一日～五日は梅自身が創作した「天女散華」が公演され、その後「御碑亭」、「黛玉葬花」、「虹霓関」、「貴妃醉酒」が演じられました（仲万美子「大正時代の京劇来日公演に関わる知識人ネットワーク」異文化／自文化に通じた芸術文化の通訳者の果たす役割、「都市芸研」第七輯 二〇〇八年）。帝劇の梅蘭芳の公演を素明と一緒に見た鏑木清方は、同じ年に「天女散花」という作品を残しています（鏑木清方記念美術館収蔵品図録「作畧編 鎌倉市鏑木清方記念美術館 二〇〇一年）。そのため、素明は、五月一日～五日の「天女散花」の公演を鏑木と見た翌日に東京を発ち、稲葉翠城（岸之助）とともに丹後へ向ったと推定されます。

素明は、五月八～十一日に稲葉家へ立ち寄っています。これは、当時の稲葉家当主であった一三代稲葉市郎右衛門が書き残した覚書の内容からわかります（稲葉家書画B〇一八附属文書「静岡初夏 結城素明筆」絵巻書）。帝劇の公演日程と、後述する素明の礼状の日付（五月一六日）から見ると、素明の来丹は、大乘寺へ向う途次であったと見て間違いありません。

「表面」大正八年五月八日午後八時素明画伯来着

九日午前中揮毫準備、午後一時より金屏風
壹双二初夏及秋の草花極彩色にて揮毫午後

八時完成、見る見る筆端より百花咲き競ひ
 坐二在る者皆類に歎す、十日午前より舟遊、釣
 魚、投網等二打興して太明神岬二上り酒宴
 後湊浜二到り午後六時帰宅、其夜坐興二車
 折等の揮毫あり、十一日朝出発

(裏面) 此画来遊記念二特二依頼し六月十日東京上野二於て金鈴
 社展覧会二出品せられしもの大明神岬裏側西方を眺め
 たる写生を基礎と
 して画かれたるものなり 紫鱗誌

一三代市郎右衛門(紫鱗)の覚書と箱書の内容から素明は、五月八日午後八
 時に稲葉家へ到着し、一泊した後の九日午前「極彩色草花之図金屏風」の揮
 毫を準備し、午後一時から描き始め、午後八時に完成したことがわかります。

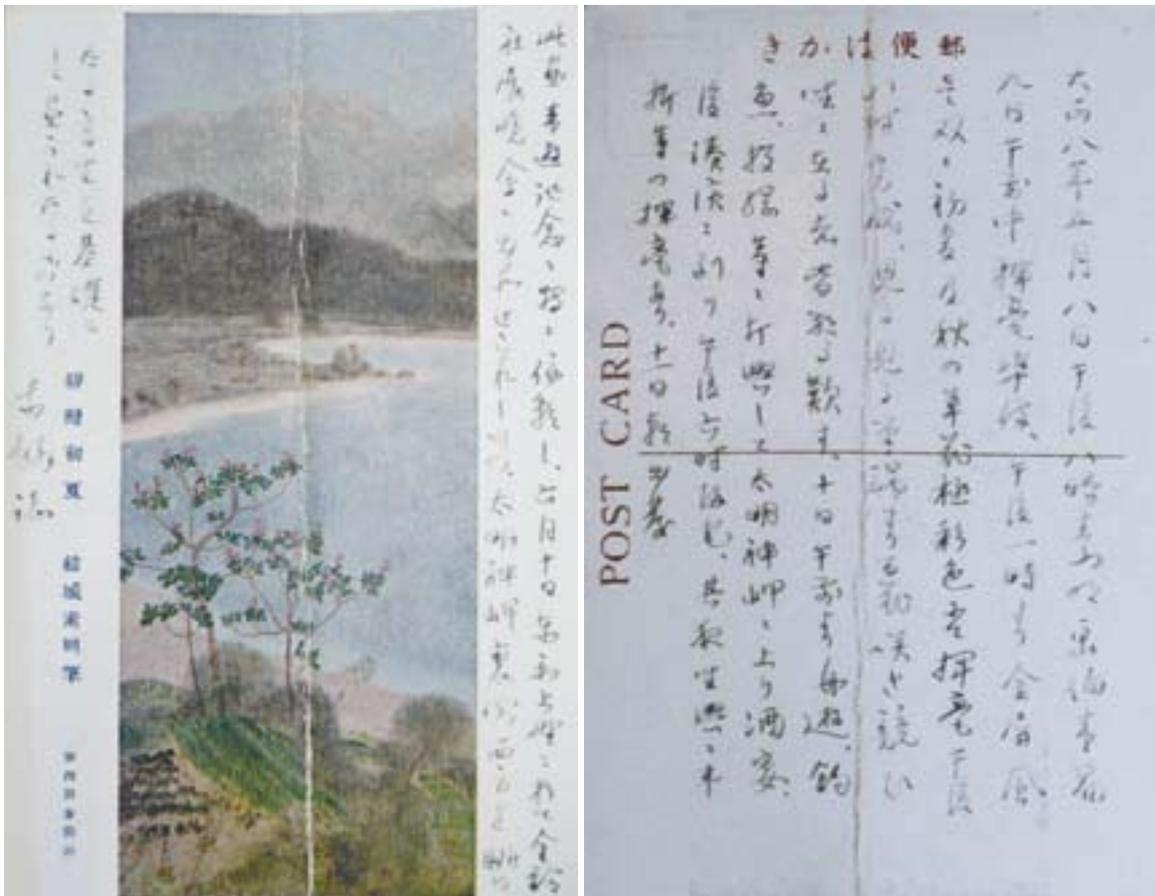
覚書には、「見る見る筆端より百花咲き競ひ坐二在る者皆類に歎す」と記され、
 素明を見守っていた稲葉家一家の驚きが目に浮かびます。

当時、結城素明は四四歳であり、金鈴社を結成し、全盛期と言ってよい時期
 でした。「極彩色草花之図金屏風」は、素明の画風の中で、前後して描かれた「草
 花図屏風」「八千草」(大正六年)、「秋の草」(同七年)、「夏草」(同八年)の流
 れを汲むものであり、写実を基本としながらも装飾美をねらった作品と評価で
 きます。

五. 「静湾初夏」図の作成

一三代市郎右衛門の覚書の後半は、「極彩色草花之図金屏風」の揮毫後に描
 かれた「静湾初夏」図の作成に関するものです。

「静湾初夏」図は、結城素明が稲葉家を訪れた山陰旅行に際して描かれた風
 景八題(「翠溪微雨」「潤頭帰牧」「静湾初夏」「長流帰帆」「夏山來水」「青巒曲浦」「山
 背疊翠」「峻岳奔流」)の一つです。これら風景八題は、大正八年六月九日、



紫鱗覚書(稲葉家書画B018 附属文書)

一九日に上野公園竹の台陳列館において開催された第四回金鈴社展覧会に「夏草（二曲屏風）」とともに出品されました（「第四回金鈴社展覧会目録」稲葉家書画B〇一八附属文書）。

一三代稲葉市郎右衛門の覚書の内容から「静湾初夏」図は、（大正八年五月）「十日午前より舟遊、釣魚、投網等二打興して大明神岬二上り酒宴」した際に「大明神岬裏側西方を眺めたる写生を基礎として画かれたるもの」であること、一三代市郎右衛門の依頼によって作成されたことがわかります。

本作品は、「夏山三題」（大正七年）の流れを汲むものであり、描線を避け濃淡や色調の変化で遠近などを描き出すなど、素明の特色がよくあらわれた作品と評価できます。

なお素明は、帰京後の五月二六日に、一三代市郎右衛門へ礼状を出しています（稲葉家書画B〇一八附属文書）。稲葉家文書に残されていた第一回金鈴社絵葉書（稲葉家文書A一一・一一四）および第四回金鈴社絵葉書（稲葉家文書A一一・一〇六）は、素明から贈られたものと推定されます。

六．一三代市郎右衛門の東上

一三代市郎右衛門は、大正八年六月九日に京都へ行きました。

京都においても所用があったようですが、ほかには六月九日～一九日に上野公園竹の台陳列館において開かれた第四回金鈴社展覧会を観覧する目的がありました。これは、「第四回金鈴社展覧会特別招待日案内」（稲葉家書画B〇一八附属文書）が残されている点からわかります。一三代市郎右衛門は、この道中、六枚の葉書を稲葉本家へ送り、近況を知らせています。これらの葉書は、「原色写真版日光の風光」という絵葉書の袋に一括して保管されていました。

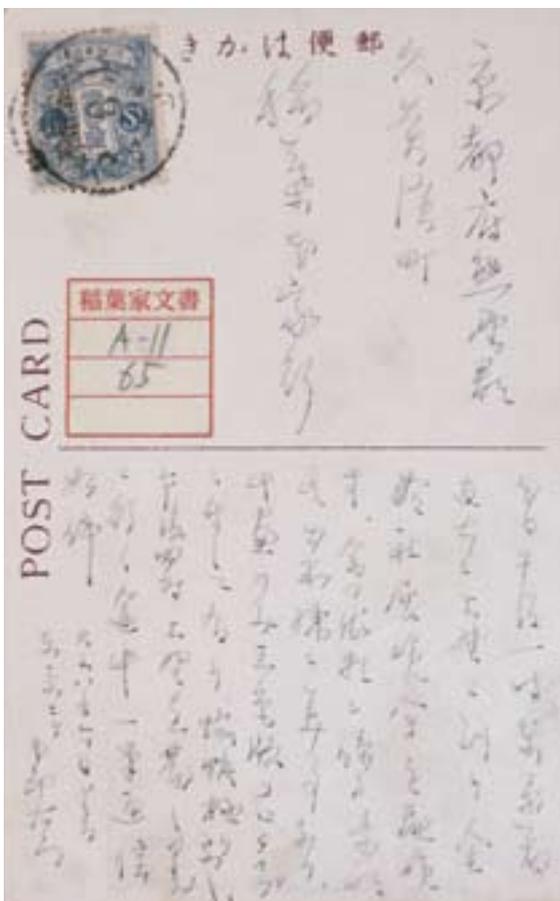
六月一〇日午後の葉書には、九日夜一〇時に予定通り京都へ到着し、大野屋へ投宿したが、この日はあまり面白い事もなく、東上してすぐに帰京するものかどうかと思ひ、目下予定が立て難い旨を記しています。京都での予定が思うように進まない様子がうかがえます（稲葉家文書A一一・〇六二）。

翌二一日夕の葉書では、夕立があったが大降りせず蒸し暑いようすと、昨夜、

偶然に畑中保敏君と出会い、本日夜行にて一緒に東上することとなったことを記しています（稲葉家文書A一一・〇六三）。

一三日の葉書には、昨日（二二日）午後に箱根へ行ったこと、自動車にて山頂へ登り、芦ノ湖（箱根山頂のカルデラ湖、神奈川県足柄下郡箱根町）にて舟遊びし、漁夫を雇って鱒釣りをしたこと、霧のため一間先も見えなかったが、四尾を釣り上げ、塔ノ沢（箱根塔ノ沢温泉）の宿にて晩酌の膳にあげたこと、この時の俳句を一句記しています。東京への途上、箱根にて途中下車したことがわかります（稲葉家文書A一一・〇六四）。

同日付のもう一枚の絵葉書（静湾初夏図絵葉書）には、一三日午後一時に東京へ到着し、ただちに上野へ向かい、金鈴社展覧会を観覧したこと、午後四時に上野を発し、日光へ向ったことが記されています。一三代市郎右衛門は、金鈴社展覧会会場の「静湾初夏」を見て「余の依頼二係る素明氏出品殊に見事なり此画のみ三色版コロタイプ二付してあり愉快極りなし」と率直な感想を記しています。絵葉書の裏面には、コロタイプ写真が原図の百分の一もあらわしていないこと、同図には投網を打つ漁夫の弥蔵が描かれていることを記しています（稲葉家文書A一一・〇六五）。

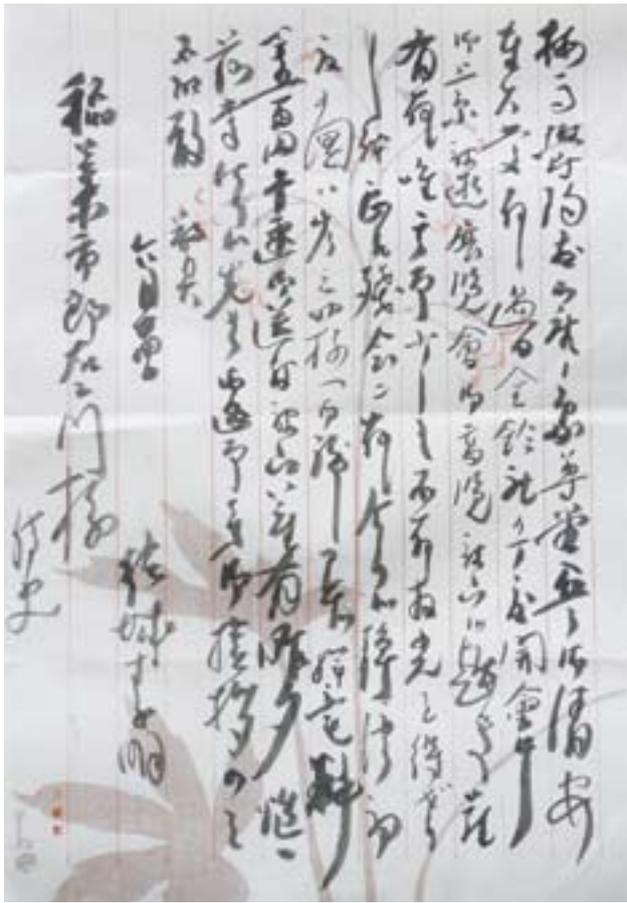


紫鱗書簡（稲葉家文書A11-065）

同日夕の葉書（消印一四日）では、日光行き途中、武蔵野にて日が暮れ、満月ではあるが光が鈍いようすを一句詠んでいます。上野から日光へ向ったことがわかります（稲葉家文書A一一・〇六六）。

さらに一六日消印の絵葉書には、日光に到着した後、季吟社にて晩酌を汲んだこと、中禅寺の滝にて遊んだことが記されています（稲葉家文書A一一・〇六七）。このあと京都へ戻ったものと思われませんが、その間の動向は不明です。一三代市郎右衛門が第四回金鈴社展覧会を観覧した翌日の一四日には、素明が礼状を出しています（稲葉家書画B〇一八附属文書）。その内容から、一三代市郎右衛門が観覧した一二日に素明が不在であったこと、一三代市郎右衛門が「静湾初夏」図の揮毫料を素明へ支払ったことがわかります。

このように「静湾初夏」図は、一三代市郎右衛門の依頼により素明が描いたものであり、第四回金鈴社展覧会終了後に、一三代市郎右衛門の所蔵となったことがわかります。



結城素明書簡（稲葉家書画B018 附属文書）

七. その後の稲葉家と結城素明

昭和十一年一月三日の「久美浜稲葉家所蔵品売立目録」（稲葉家文書A一〇・〇二五ほか）によれば、稲葉家には、「極彩色草花之図金屏風」「静湾初夏」図以外にも、「青緑山水」（尺八絹本）、「緑陰読書」（尺五絹本）、「水墨山水」（半切）という三作品があったことがわかります。これ以外に残されているのは、

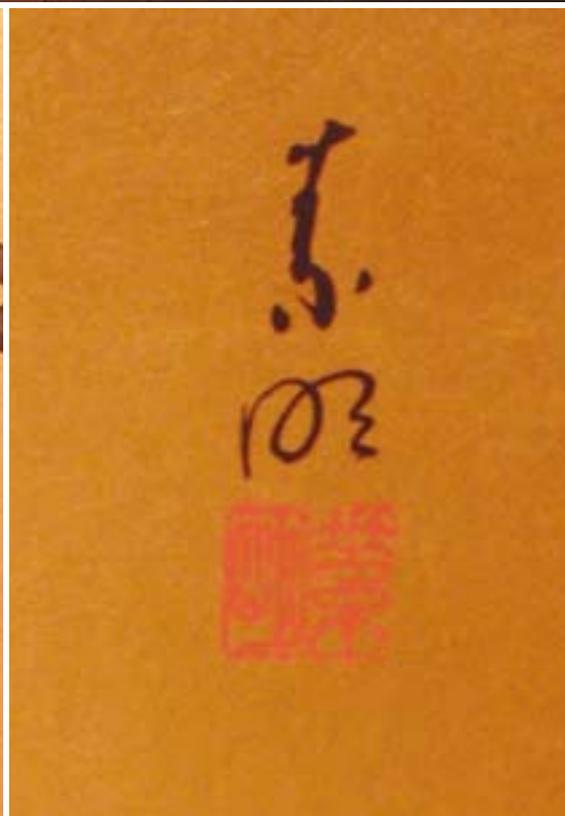
色紙二枚（稲葉家文書E八一・〇九九）のみです。

素明と稲葉家は、その後も岸之助が関わりをもっていました。素明より岸之助宛の昭和四（一九一九）年の年賀状および昭和六年一月一日付の書簡が残されています（稲葉家文書B一〇三・一三〇）。また素明は、昭和一六年二月に岸之助が亡くなった際に、長男の令吉に対して甲意と寸志御供を述べた書簡を送っています（稲葉家文書E七八・二五三）。

先述したように素明は、佐藤正持に関する調査のために、昭和一六年六月に宮津を、翌一七年四月には峰山を訪れています。これは、岸之助没後のことでした。



結城素明色紙（稲葉家E78-253）



稲葉家展示解説リーフレット 一

結城素明と稲葉家

編集・発行 京丹後市教育委員会

発行年月日 平成三二年三月